

琉球大学学術リポジトリ

ケニアの私立保護区におけるワイルドライフ・ツーリズムに関する予備的研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2013-12-26 キーワード (Ja): ワイルドライフ・ツーリズム, 野生動物, ケニア, 私立保護区, 質問紙調査 キーワード (En): wildlife tourism, wildlife, Kenya, private conservancy, questionnaire survey 作成者: 武田, 美亜, 松本, 晶子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/28074

ケニアの私立保護区における ワイルドライフ・ツーリズムに関する予備的研究

Preparatory research on wildlife tourism at private conservancy in Kenya

武田 美 亜*・Martin Mulama**・松本 晶子***
Mia TAKEDA, Martin MULAMA, Akiko MATSUMOTO-ODA

We examined visitors' expectation and evaluation to their wildlife tourism experience at a private conservancy in Kenya. 34 visitors responded questionnaire survey in their stay. Tourists believed conservation of wildlife is important as well as comfort of tourists. They satisfied with their trip irrespective of number of species that they could watch. Discussion focused to need for the comparative study of wildlife tourism between other private conservancies or national conservancies.

Key words

ワイルドライフ・ツーリズム, 野生動物, ケニア, 私立保護区, 質問紙調査
wildlife tourism, wildlife, Kenya, private conservancy, questionnaire survey

1. 問題の所在

ワイルドライフ・ツーリズム (wildlife tourism) とは, 野生動物の観察を目的とした観光旅行のことである (Newsome, Dowling, & Moore, 2005)。ワイルドライフ・ツーリズムが行なわれる状況は多様であり, たとえば捕獲した野生動物を観察するもの (動物園など), ある程度人の手が入った環境を使うもの (サファリパークなど), 全くの自然環境を使うもの (ホエールウォッチングなど) などに分類できる。野生動物とのかかわり方も1つではなく, 観察だけを行い野生動物に対する直接的な働きかけをしないもの, 餌付けをするもの, 野生動物に直接接触するなど非常に直接的な相互作用をするものなどがある。

ワイルドライフ・ツーリズムの盛んな場所の1つとして, ケニア共和国が挙げられる。ケニアはその地理的・地形的な性質ゆえ多様な生態系を持ち, 生息する野生動物種の数も非常に多い。そのため, これらを資源とした観光産業が農業に次ぐ重要産業と位置づけられ, 推進されている (ARC国別情勢研究会, 2012)。観光産業への取り組みは, 東アフリカの中ではケニアが先鋒であった (Deluca, 2002)。アフリカの観光産業初期とも言える1920年代には観光産業関連のインフラストラクチャの本部が軒並みケニアに設置され, イギリスからの独立後も政府は観光産業をコーヒーや茶と並ぶ外貨取得産業と位置づけて重視し, 1980年代にはケニアはアフリカ国内でチュニジアやモロッコと並ぶ観光地となった (Deluca, 2002)。1990年代後半2000年代後半には治安の悪化や政局混乱によって観光客の停滞, 減少も見られたが (ARC国別情勢研究会, 2012), その後は増加し, 現在は外貨取得の21%, GDPの12%が観光産業によるものとなっている (Kenya Wildlife Service, 2013)。

広大な保護区を持つ歴史的経緯は, 以下の通りである。植民地時代, 主にイギリスから白人入植者がやってきて農場を開き, 商品作物の栽培を始めた。ケニア沿岸のモンバサと隣国ウガンダの首都カンパラとを

* 青山学院女子短期大学, ** Ol Pejeta Conservancy, *** 琉球大学大学院観光科学研究科

結ぶ鉄道が敷設され、白人たちが内陸に進出すると、そこには野生動物が多く生息しており、それらを狩る狩猟旅行が盛んに行なわれるようになった。しかし野生動物の絶滅が危惧されるようになったため、政府は狩猟の制限と保護区の設置を行ない、野生動物の保護に取り組み始めた（松田・津田, 2012）。今では多くの国立公園、国立保護区や動物保護区が指定され、国および地方自治体によって管理されている。保護区は国立のものだけではない。植民地時代に白人入植者が農場として所有した土地のいくつかは、私立の保護区となっている。私立保護区は政府や国立の保護区と協力しながらも独自のポリシーやルールを持っているため、国立の保護区に比べてアクティビティの自由度をやや高めることができる。たとえば国立の保護区は宿泊客を除いて午後6時から午前6時の間は保護区への立ち入りが禁じられており、ナイトサファリが許されていないが（Kenya Wildlife Service, 2013）、私立保護区であるOl Pejeta Conservancy（Ol Pejeta Conservancy, 2013）ではナイトゲームドライブを行なっており、これを私立の保護区であるからこそ行なえるアクティビティとして宣伝している。

近年、私立保護区の重要性が増してきている（Newsome et al., 2005）。理由の1つは国が保護区維持のための財源を確保できなくなり国立の保護区の管理が十分にできなくなった場合に、私立保護区がその役割を補完できうることである。それに加え、地域コミュニティとの協力、コミュニティ発展への寄与という点でも、私立保護区の果たす役割は大きい。本研究では、私立保護区におけるワイルドライフ・ツーリズムの意義や課題を明らかにするための取りかかりとして、私立保護区の観光客を対象に、予備的な調査を行なう。

2. 方法

2.1. 研究フィールド

ケニア共和国内のOl Pejeta Conservancy（OPC, Ol Pejeta Conservancy, 2013）で調査を行なった。OPCはライキピア県ナニユキ（Nanyuki Town in Laikipia County）にある私立保護区で、NPO団体のOl Pejetaが管理、運営している。OPCはアフリカ大陸随一のクロサイのサンクチュアリおよびチンパンジーのサンクチュア리를擁し、野生動物保護と農業・牧畜の両立、観光業による経済発展と現地コミュニティの維持発展を趣旨としている。2012年にはEco Tourism Kenyaが主催するPrivate Conservancy of this yearに選ばれた実績も持つ（Eco Tourism Kenya, 2012）。

2.2. 調査地、調査期間

OPC内にある5つの宿泊施設（Sweetwaters Tented Camp, Ol Pejeta House, Porini Rhino Camp, Kicheche Camp, Pelican House）で、OPC内の宿泊施設（前述の5つとOl Pejeta Bush Camp）に1泊以上した観光客を対象として調査を行なった。これら宿泊施設の管理者はそれぞれ異なる。Sweetwaters Tented Camp, Ol Pejeta House, Ol Pejeta Bush Campの3つはホテル業者（Serena Hotels）、Porini Rhino CampとKicheche Campの2つは民間観光業者、Pelican HouseはOPCが管理している。

調査期間は2011年9月下旬から2012年9月上旬までの約12ヶ月間であった。

2.3. 手続き

現地調査統括者（第2著者）が各宿泊施設の管理者に調査用紙を渡し、回答依頼の仕方などについて概要を伝えた。実際に観光客に調査用紙を配布し回答依頼を行なったのは、各宿泊施設のスタッフであった。

各宿泊施設のスタッフは、観光客の滞在中（多くの場合、夕方のゲームドライブ後）に調査用紙の配布を行なった。観光客には回答がボランティアベースであることを説明し、回答したものは各宿泊施設のスタッフに渡すよう依頼した。

2.4. 質問紙の構成

質問紙はA4サイズ用の紙1枚（両面）に収まるよう調整した。調査項目は次の通りであった。(1) 宿泊施設：前述の6つの中から選ばせた¹⁾。(2) OPC情報入手先：OPCのことを何で知ったかについて、8つの選択肢を用意し、当てはまるもの全てを選択させた。(3) 来訪経験：OPCおよびOPC以外の保護区それぞれについて、これまでの来訪回数を尋ねた。(4) 野生動物との遭遇：OPC公式webサイトで紹介されている野生動物10種について、見られることを期待していたものと、実際に見られたものを尋ねた。具体的には、絶滅危惧種のビッグ・ファイブと呼ばれる種（クロサイおよびシロサイ、ヒョウ、アフリカゾウ、スイギュウ、ライオン）と、シマウマ、ハーテビースト、チーター、チンパンジーであった。(5) インフラの評価：OPC内のインフラとして公式webサイトで紹介されていたもののうち、移動手段、宿泊施設（建物、水、および電気の供給）、耐肉食動物設備の3点について、重要性和満足度をそれぞれ7件法（1. 重要でない～7. 重要である；1. 満足でない～7. 満足である）で尋ねた。(6) ワイルドライフ・ツーリズム管理の視点：ワイルドライフ・ツーリズムを管理する上で、野生動物の保護と観光客の快適さのそれぞれがどの程度重要だと思うかを、7件法（1. 重要でない～7. 重要である）で尋ねた。(7) 旅の満足度：今回の旅の満足度を0～100（100が非常に満足）の数値で尋ねた。(8) 回答者の性質：OPCへの宿泊期間、性別、年齢、居住地域（国、地域）を尋ねた。

3. 結果と考察

3.1. 回答者の性質

回答者は34人であった²⁾。回答者の性質（デモグラフィック変数および宿泊施設、OPCについての情報入手先等）は表1に示した。

OPCに関する情報入手先は公式webサイト、雑誌と個人的コミュニケーションが主要なものであった。個人的コミュニケーションの割合が大きいことは、いわゆる口コミでやってくる観光客が多いことを示唆していると思われる。国立の保護区に比べてアクセスできる関連情報が少ないことも1つの要因かもしれない。OPCへの来訪は初めてという人が7割を占めていたが、ほかの保護区ならば行ったことがある人が半数を越えていたことから、ワイルドライフ・ツーリズムに対してある程度経験や関心のある人が、有名な国立の保護区ではなくOPCを特に選んで来訪している可能性も考えられる。ただしこの点について本研究の結果から詳細な解釈はできず、推察にとどまる。

表1 回答者の性質

項目	%	項目	%	項目	%
宿泊施設		OPC来訪経験		性別	
Sweetwaters Tented Camp	26.5	なし	70.6	男性	50.0
Ol Pejeta House	14.7	あり	29.4	女性	35.3
Ol Pejeta Bush Camp	14.7			未回答	14.7
Porini Rhino Camp	17.6	OPC以外の野生生物		年齢	
Kicheche Camp	11.8	保護区来訪経験		30代	5.9
Pelican House	14.7	なし	47.1	40代	2.9
		あり	52.9	50代	5.9
OPC情報入手先（複数回答可）				60代	8.8
公式webサイト	94.1	旅の満足度		未回答	76.5
上記以外のwebサイト	17.6	40%	5.9	居住地域	
新聞	0	60%	8.8	ヨーロッパ	29.4
テレビ	0	70%	11.8	アフリカ	17.6
雑誌	73.5	80%	14.7	北米・カナダ	11.8
上記以外のマスメディア	41.2	90%	5.9	オーストラリア	2.9
個人的コミュニケーション	85.5	100%	52.9	回答判読不能	14.7
				未回答	23.5

3.2. 野生動物との遭遇

各野生動物との遭遇への期待と実際に遭遇できたかどうかに関する回答を表2に示した。ほぼ全員が全ての種を見られることを期待していた。ハーテビーストのみ特に遭遇を期待しない回答者がいたが、これはハーテビーストがほかの動物に比べてあまり知られていない可能性が考えられる。たとえばワイルドライフ・ツーリズムに関するある文献 (Schackley, 1996) において、10種の野生動物のうちハーテビーストだけが言及されていなかった。

表2 野生動物との遭遇への期待と実際 (%)

生物名	期待	実際
クロサイ (Black rhino)	100.0	97.1
シロサイ (White rhino)	100.0	97.1
ヒョウ (Leopard)	100.0	29.4
アフリカゾウ (Elephant)	100.0	55.9
スイギュウ (Buffalo)	100.0	76.5
ライオン (Lion)	100.0	61.8
シマウマ (Grevy's zebra)	100.0	70.6
ハーテビースト (Jackson's hartebeest)	91.2	82.4
チーター (Cheetah)	100.0	38.2
チンパンジー (Chimpanzee)	100.0	94.1
その他	8.8	11.8

野生動物が相手であるため、ゲームドライブに出たとしても保護区内にいる全ての種が見られるとは限らない。回答者の中には調査項目で挙げた種を1つも見られなかった回答者もいた。ほかの回答者は5~10種に遭遇していた(遭遇種数M=7.15, SD=1.92)。サイおよびチンパンジーは9割以上の回答者が見ていたが、これはサンクチュアリがあるためにほかの種よりも遭遇しやすかったと思われる。

野生動物との遭遇が旅の主要な目的だとすれば、遭遇できた種の多少によって旅の満足度が変わる可能性が考えられる。そこで実際に遭遇

できた種数と旅の満足度の相関係数を見たところ、有意な相関は見られなかった ($r(34)=.02$, ns.)。

3.3. ワイルドライフ・ツーリズム管理の視点とインフラおよび旅の評価の関連

ワイルドライフ・ツーリズム管理の視点(野生動物の保護と観光客の快適さそれぞれをどの程度重要と思うか)とOPCのインフラの3つの側面(移動手段、宿泊施設、耐肉食動物設備)について、評定結果を表3に示した。インフラの重視度の平均値を見ると、移動手段に関しては7段階評定中の5とやや重視していたが、宿泊施設と耐肉食動物設備に関しては中点を下回る評定であり、それほど重視していないという結果であった。これは、ある程度のレベルが維持されているという前提の下で、それ以上の豪華さや厳重な安全性までは求めないという認識であるかもしれないが、本研究の結果からこれ以上の詳細な解釈はできない。一方で満足度を見ると、いずれの側面もおおむね満足という評価であった。それほど重視しないと評定されていた耐肉食動物設備に対する満足度がほかの側面に比べるとやや低めであったが、これは不

表3 インフラの評価およびワイルドライフ・ツーリズム管理の視点

項目	評定値 (%)	1	2	3	4	5	6	7	未回答	M(SD)
インフラの評価：重要度 (1. 非重要~7. 重要)										
移動手段		0	8.8	14.7	14.7	14.7	23.5	23.5	0	5.00(1.70)
宿泊施設		8.8	11.8	26.5	38.2	8.8	5.9	0	0	3.45(1.28)
耐肉食動物設備		14.7	23.5	41.2	5.9	11.8	2.9	0	0	2.85(1.30)
インフラの評価：満足度 (1. 不満足~7. 満足)										
移動手段		0	0	0	0	11.8	14.7	73.5	0	6.61(0.70)
宿泊施設		0	0	5.9	0	14.7	11.8	64.7	2.9	6.33(1.14)
耐肉食動物設備		0	2.9	5.9	11.8	5.9	20.6	50.0	2.9	5.91(1.47)
ワイルドライフ・ツーリズム管理の視点 (1. 非重要~7. 重要)										
野生動物の保護		0	0	2.9	2.9	0	11.8	82.4	0	6.68(0.88)
観光客の快適性		0	0	0	8.8	8.8	11.8	70.6	0	6.44(0.99)

満というわけではなく、耐肉食設備があることのありがたみを実感するような事態がなかったために積極的に満足という評価がされにくかったのかもしれない。

ワイルドライフ・ツーリズム管理の2つの視点（野生動物の保護重視度と観光客の快適さ重視度）については、どちらもおおむね重要であると評定されていた。また、2つの視点の重視度評定値の間には中程度の正の相関が見られた($r(34)=.52, p<.01$)。本研究では2つの視点について別々に尋ねる形を取ったため、両方とも重視するという結果になった。これらを短絡的に相反する視点とするべきではないであろうが、片方に野生動物の保護、他方に観光客の快適さを置いた場合に相対的にどちらを選ぶかを尋ねた場合には、ワイルドライフ・ツーリズムに対する価値観や観光中の行動などを予測しやすいかもしれない。

ワイルドライフ・ツーリズム管理の視点をお互いに制御変数として、管理の視点とインフラおよび旅の評価の偏相関係数を算出した。この結果を表4に示した。

観光客の快適さ重視度による影響を制御した野生動物の保護重視度と各インフラの重視度の偏相関係数を見ると、野生動物の保護重視度は、移動手段の重視度との間には相関がなく、宿泊施設に対する重視度および耐肉食動物設備に対する重視度との間には有意ではないものの弱い負の相関が見られた。つまり野生動物の保護を重視しているほど、宿泊施設や耐肉食設備は重視しないという傾向であった。一方、野生動物の保護重視度とインフラに対する満足度との相関を見ると、野生動物の保護重視度と移動手段に対する満足度の間には弱い正の相関が見られ、野生動物保護を重視しているほど移動手段に満足していた。OPCでは自然環境保護および観光客の安全のため、原則として野生動物を見に行くためには必ず車に乗らなければならない。そのため、野生動物の保護が重要と考えるほど、移動手段に関するOPCの方針に賛同し、満足しやすかったのかもしれない。野生動物の保護重視度と宿泊施設に対する重視度および耐肉食動物設備に対する重視度の間にはほとんど相関が見られなかった。おおむね観光客の快適さのみに関わると考えられる宿泊施設や耐肉食動物設備に関しては、野生動物の保護を重要と思うほど重視しなくなり、特に不満も感じないのかもしれない。

野生動物の保護重視度による影響を制御した観光客の快適さ重視度と各インフラの重視度の偏相関係数を見ると、観光客の快適さ重視度は移動手段に対する重視度との間には弱い正の相関が見られたが、ほかの2点に対する重視度との間には相関がほぼ見られなかった。一方、観光客の快適さ重視度と各インフラに対する満足度との相関を見ると、観光客の快適さ重視度と移動手段に対する満足度の間には有意な相関が見られず、観光客の快適さ重視度と宿泊施設に対する満足度および耐肉食動物設備に対する満足度との間には、それぞれ弱い正の相関と中程度の正の相関が見られた。観光客の快適さを重視するほど移動手段を重視する傾向が見られたのは、OPCを訪れる観光客にとって野生動物を見に行くことこそがこの旅に期待していることだからかもしれない。実際に満足したかどうかについては相関が見られなかったが、これは観光客の快適性重視度の高低に関わらずおおむね満足度が高かったことを反映していると考えられる。観光客の快適性を重視するほど耐肉食動物設備に対する満足感が高かったのは、安全性を含む観光客の快適性を重視する人ほど耐肉食動物設備に対して積極的にポジティブな評価をしたからかもしれない。

旅全体の満足度は、野生動物の保護重視度とも観光客の快適性重視度とも相関は見られなかった。もと

表4 ワイルドライフ・ツーリズム管理の視点とインフラおよび旅の評価の偏相関

	重視度			満足度			旅の満足度
	移動手段	宿泊施設	耐肉食動物設備	移動手段	宿泊施設	耐肉食動物設備	
野生動物の保護 (観光客の快適性を制御)	.00	-.29	-.20	.31+	-.09	-.16	-.08
観光客の快適性 (野生動物の保護を制御)	.33+	.07	.14	-.00	.26	.52**	-.07

note. +: $p<.10$, *: $p<.05$, **: $p<.01$.

もと半数以上の回答者が100%の満足度評価をしているため、よほどネガティブな経験をしない限り、こうした旅行の満足度は高く感じられるのかもしれない。ただし、本研究は滞在中、すなわち旅の最中に実施されており、帰宅してから旅を振り返っての満足度ではないこと、旅に満足している人だけが回答してくれたなどセレクション・バイアスがかかっている可能性もあることから、本研究の結果の解釈および一般化には十分な注意が必要である。

4. 総合考察

本研究ではケニア国内の私立保護区であるOl Pejeta Conservancyを訪れた観光客を対象に、ワイルドライフ・ツーリズムに関する予備的調査を行なった。その結果、観光客は野生動物の保護を重要と考えていた。それと同時に自分たち観光客の快適さも重視するか、もしくは相対的には重視しない傾向が見られた。また、見られた野生動物種の数に関わらず旅の満足度はおおむね高かった。以上のことから、OPCは私立保護区として野生動物の保護という役割を果たしながら観光地としても観光客に高い満足感を与えていることが示唆された。ただし、本研究の解釈には十分な注意が必要である。理由の1つはデータ数が少なく分析結果が安定しているとは言えないこと、もう1つは旅に特に満足してくれた人だけが回答に協力してくれたなどセレクション・バイアスがかかっている可能性があることである。

本研究は予備的調査であり、OPCでの調査しか行っていないが、私立保護区におけるワイルド・ツーリズムの特質を明らかにするためには、ほかの私立保護区や国立の保護区についても同様の調査を行い比較できることが望ましい。そのためには、必要に応じて観察やインタビューによる質的な調査を行ない、私立保護区におけるワイルドライフ・ツーリズムの特長や課題がどこにあるか、めどを立てることが必要であろう。その上で、的を絞った質問をさまざまな保護区で実施し比較することができれば、個々の保護区の事例にとどまらない、私立保護区の意義や課題が見えてくるであろう。

注

- 1) セルフキャンプを除くOPC内の宿泊施設で野生動物観察を主要な活動としているのはこの6つである。2011年にRift Valley Adventuresという宿泊施設が設置されたが、これはアウトドアスポーツなどを主要な活動としており、本調査ではこの施設の利用者を調査対象とはしなかった。
- 2) 実施依頼の際、現地スタッフに渡した調査用紙枚数は350枚であったが、その後各宿泊施設スタッフに渡した後、実際の配布数は数えられなかった。そのため回収率は算出できない。

引用文献

- ARC国別情勢研究会 (2012). ARCレポート—経済・貿易・産業報告書— 2012/13年版 ARC国別情勢研究会.
- Deluca, L. M. (2002) Tourism, conservation, and development among the Maasai of Ngorongoro District, Tanzania: Implications for political ecology and sustainable livelihoods. Ph.D. dissertation, University of Colorado.
- Eco Tourism Kenya (2012). 2012 Award winners. <http://www.ecotourismkenya.org/award/page.php?id=63> (最終アクセス：2013年6月29日) .
- 松田素二・津田みわ (編著) (2012). ケニアを知るための55章 明石書店.
- Newsome, D., Dowling, R., & Moore, S. (2005). Wildlife tourism. Clevedon, UK: Channel View Publications.
- Kenya Wildlife Service (2013). Park rules. http://www.kws.org/tourism/park_rules.html (最終アクセス：2013年6月29日) .

Ol Pejeta Conservancy (2013a). Ol Pejeta Conservancy. <http://www.olpejetaconservancy.org/>
(最終アクセス：2013年6月29日) .

Shackley, M. (1996). Wildlife tourism. London, UK: International Thomson Business Press.

謝辞

本研究の調査作成にあたり, 原島雅之氏 (千葉大学地域観光創造センター), 菅さやか氏 (愛知学院大学) のご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。本研究はJSPS科研費23405016によって実施したものである。

連絡先 (第1著者)

miamia@h7.dion.ne.jp 〒150-8366東京都渋谷区渋谷4-4-25